中大井荘關係文書は伊藤氏の最も苦心蒐集されたものであつて、通史の大井荘時代史と相俟つて荘園制度の研究に資するところ多大である。尙ほ是等古文書金石文には句讀點及び訓點を施して世人の讀解に便にし、卷末には市史年表及び索引を附してある。（菊判上中下三卷、二千六百餘頁、大垣市役所發行、價不明）〔松野〕

●花祭　早川孝太郎著

三河國北設樂郡を中心として行はるゝ花祭に關した極めて精密な記錄である。それは十二月又は一月に行はれる、舞を中心とした行事で神下し—舞ひ—神下し—舞—神上げの順序を以て行はれ、舞ひには假面を用ひるといふ。信遠の國境に近き三河の山地に於て冬のさなか灼熱せる興奮の中に夜を徹して行はるゝといふ事を考へて見るだけでも限りなき興味である。その地に近く生れた著者は柳田國男氏の影響をうけつゝその民俗學的調査に從ひ今この前後二編あはせて千六百頁の報告を出されたのである。畫家である氏は多數の自作の畫を加へ他の寫眞と共に理解を助けて居る。その記述は客觀的觀察に忠實にしてつとめて論斷を避けてゐる。從つてこの行事がもつ種々の意味については殆ど語られて居ない。これは「其批判が至つて乏しく、解說の甚だしく臆病で」あつて「結論が今はまだ下されて居らぬ」ことを「何よりも嬉しい」として序して居らるゝ柳田氏の主張が自らこの書の構成に現はれて來たものと思はれるがかかる行事のもつ意味といふ事は必しも學者が外部から附加へるものではなくその行事の中に自ら含まれてゐるものではあるまいか。卽その行事者及觀衆がそれによつて何を期待し又それをいかに受容して居るかといふところにその意味があらはれて居るのである。それは客觀的な行事の型とは違つて捉へにくいものかも知れないが必しも不可能ではないと思ふ。この大著をなされた著者の眞摯なる努力に深き敬意を表すると共に望蜀の願ひとしてこの事を書き加へて置く。これは民俗學が內面的な人生學となる爲に必ず辿らなければならない道であると思ふからである。（菊判二冊、前編七一九頁、後編八七〇頁、價　貳五、〇〇圓、

東京岡書院發行）〔肥後〕

◎加賀藩史料 第二編

侯爵　前田家編輯部編

第一編についで慶長十一年より寛永十七年に至る大阪陣を轉機として幕府の諸施設の實施さるゝに伴ひ整備された藩政の諸事項、經濟、風俗等の諸事象が細大網羅されてゐる。統一的な幕府治下に於いて尙各自特殊の歷史を經過した各藩個々の研究が要望せられる時一般には容易に觸れ得ない藩の記錄に基いて根本的な整理が行はれる事は大に望ましい事である。たゞ一言希望する所は頭註が單に考異注釋を加へらるるのを其等は行間に挿入し代りに重要事項を記さるれば利用價値の更に大なるものがあると思はれる。（菊版一〇一二頁、非賣品）〔藤〕

◎大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告

第一輯

大阪府はさきに府下の史蹟名勝天然記念物に關する概括的調査報告書を出すこと五册に及んだが今や更にその精査報告書と稱すべきものゝ第一輯を出されるに至つた事は慶賀に堪へない。收むるところ九項、就中通法寺址、狹山池、菅生神社、今城塚四天王寺出土瓦等を主なるものとする。（四六倍判、本文一五一頁、圖版三十八葉、非賣品、大阪府發行）〔肥後〕

◎大阪府官幣社現行特殊慣行神事

大　阪　府　編

大阪府下の官幣社住吉、大鳥、生國魂、板岡、水無瀨、四條畷諸社の現行特殊神事を起源並沿革、神事執行の模樣の二項に分ち、多數の寫眞を加へて興味ある解說を施したものである。其中住吉神社の十種神事が全頁の三分の二を占めて解說されてゐる。尙其際名所圖會類に見えた舊儀を多數收めて現行のものとの比較を試み興味を添へてゐる用意ある編纂を多くしたい。本書は興味を交へた通俗的な小册子ではある。然し近時急激に成長した民族學の對象として神社、特に神事が古代思想生活の殘存